

## 土方歳三論 ―農民から武士としての一生―

友田 翔大

(丸田博之ゼミ)

はじめに

流試衛館道場時代、新撰組時代、北上時代、箱館五稜郭時代などでまとめたいと思う。

### 本論

私が土方歳三を題材にしたのは、新撰組という組織一つでまとめてやることは、面白いとも思ったが組織の中で一人のメンバーとでしか表現できないという欠点から新撰組という組織を卒業論文としての題材とすることを辞めたのである。また、新撰組の中でも人気メンバーの近藤勇や沖田総司、斎藤一という人たちでも良かったが、新撰組の中では土方歳三が私自身一番好きな隊士で小学校の図書室にあるような歴史の本や教科書に載っている歴史以外の日本の歴史を知ってみたいと感じたのが土方歳三だったのである。そして、新撰組を少しでも知っている人たちのイメージにあると思うが、鬼の副長や血の涙もない冷徹な男、味方は粛清して敵は討伐というようなイメージを持った方たちが多いと思う。確かに、新撰組は戊辰戦争で幕府側として戦い、幕末の動乱期と明治と元号が変わったぐらいで活躍したグループで、そのころに流行った言葉で「勝てば官軍負ければ賊軍」という言葉があった。幕府側の新撰組は薩摩藩と長州藩連合の新政府軍に敗れてしまった。新撰組は京の町で大量に人を斬り殺したことからあることなどまで言われていた。そんな中でも土方歳三は副長という立場で色々な指示を出してきたことからかなりの悪の番人みたいに言われていたのである。また、第二次世界大戦前までは薩長の人々が政治を担う立場の人間に多かったことから、新撰組自体も悪だった。新撰組自体は最近になり色々分かり始めてきた新しいテーマなので私なりに、漫画やアニメ、ドラマ、歴史小説のイメージを崩せるような卒業論文としたいのである。そして、取り上げていこうと思う内容は、農民の息子として奉公していた頃、天然理心

プロフィールは、土方歳三義豊。土方が姓、歳三が通称、義豊が実名である。通称が日常的に使われることが多いので一般的には歳三と言われていた。また、「土農工商」という身分の壁があり非公式の姓を伝えた。土方もこれにあたる。よって、多摩時代の土方歳三は「石田の歳三」「石田歳三」と呼ばれていた。なお、明治以前は音が同じであれば、漢字表記にはこだわらない一面があり、新撰組にしても「新選組」と書かれることも多い。歳三も後年を含めると「歳蔵、年蔵、年三、俊蔵、敏三……」と様々に記される。別名は内藤隼人であり、戊辰戦争中に名乗っていた土方歳三の偽名である。生年と生まれた国は、一八三五年五月五日、武州多摩郡石田村。新撰組在籍年数は一八六三年（文久三年）の創設時、死ぬまでである。享年の三十五歳。一八六九年（明治二年）五月十一日に亡くなっている。剣術流派は天然理心流。家紋は、左三つ巴である。また、面白いことに雅号があり、豊玉という。二十五歳〜二十八歳の青春の一時に詠んだ俳句でそれをまとめたものを、『豊玉発句集（ほぎよくほつくしゅう）』というのだ。

### 幼少期から青年期の土方歳三。

はじめに、幼少期から青春期を彩るエピソードが、江戸市中の町家への奉公であった。通説では、奉公は二回にわたり、まずは十一歳の時、

歳三は呉服屋商・いとう松坂屋(現在の松坂屋上野店)の小僧となったが、店の人と喧嘩をしてしまい、約九里(三十六キロ)の道を夜通し歩いて生家へと戻る。再び江戸に出たのは、数年後で今度は奉公先の女性と関係を結んでしまったために、暇を出されたのである。二度目の奉公明けのころ、「武人になり、名を天下にあげたい」と決意した歳三は十七歳で天然理心流入門するのだ。その後は、日野宿・佐藤邸に入り浸り、あるときは家伝の「石田散葉」(打ち身、捻挫に利く飲み薬)を背負って行商に出掛け、その道中で他流試合を申し込むなどして剣術修行に明け暮れたというのだ。ところが、近年公表された石田村の「宗門人別帳」の控えからは、これらの伝承とは異なった事実が浮かび上がった。歳三が奉公に出たのは「人別帳」によると十三歳か十四歳のことであり、そのまま二十三歳まで江戸で奉公を続けていたことになる。

また、二度目の奉公を終えた後、佐藤彦五郎邸にしばしば出入りしていたとされるが、当の彦五郎の日記(『佐藤彦五郎日記』)に歳三の名前を発見できるのは二十五歳を迎えた安政六年(一八五九)になってからのことである。その文章とは、「ある縁談のことで、小野路村の橋本方へ行き、そのとき俊蔵(歳三)も同行した」という記事である。次いで翌年の万延元年(一八六〇)五月に「昨日近藤勇先生が参り、今日石田歳蔵と同行して八王子から五日市へ行く」と記される程度なのだ。もう一つ興味深い資料があり、万延元年八月に刊行された関東の剣術者名簿『武術英名録』に、まだ入門一年半の歳三が「天然理心流 武州日野宿 土方歳蔵」と掲載されているのだ。上達のスピードもすごいことであるが、『天然理心流神文帳』との間に住所の違いが見られるのである。歳三が日野宿に居住したとも取れるが、佐藤彦五郎が三か月前に石田歳蔵と記した点からすれば、「石田村の居住の土方歳三が、修行のため日野宿の道場へ通った」と解釈するのが良いと思われる。

しかし、十七歳の時に転機が訪れていたのは事実と思われる。それを物語るのが、小島鹿之助の『両雄士伝』の「甫十七、入邦武門」という、十七歳のときに天然理心流の近藤周助に入門したとする記述である。おそらく、歳三は十七歳の時に一度目の奉公を終え、二度目には特別な配慮を得て、奉公をしながら剣術を学ぶことが許されたのだろう、もちろ

ん、そのような自由は普通の奉公ではありえない。許されるとすれば、他人ではなく身内である。土方家には内藤新宿や四谷に数件の親戚がいたので、その一軒が歳三を受け入れたのではないかと思われるのだ。内藤新宿であれ、四谷であれ、市谷の甲良屋敷にあった近藤周助の道場・試衛館とは遠い距離ではない。これが歳三と試衛館の接点であり、すでに道場には嘉永二年(一八四九)に周助の養子となった近藤勇がいた。以後は『両雄士伝』が近藤勇と意気投合して「親交如兄弟」と記す関係と発展することとなったのである。また、「天然理心流は無名の田舎剣法」といった風に描かれるケースが多いが、『武術英名録』に掲載された剣客の流派は「柳剛流、神道無念流、北辰一刀流、天然理心流……」の順であり必ずしも武州・相州での知名度が低いわけではないのである。安政六年三月、歳三は天然理心流に正式入門を果たしたが、このとき試衛館には嘉永五年か六年に内弟子となった沖田総司と、近藤勇がおり、彼らと立ち会って敗れた。安政五年前後に門人となった山南敬助もいたのである。小説や大河ドラマ「新撰組」では、山南敬助は歳三の後に食客となつている描写が多いのだが最近の新撰組の關係本では歳三が奉公をしていたことと試衛館に入門した時期を踏まえてこのように変化したのではないかと思うのである。なお、歳三と同じ日野在住の門人に井上源三郎がいたが、井上の入門は嘉永元年である。万延元年九月には天然理心流一門による府中六所宮(現大國魂神社)への献額があり、歳三はそのさいに披露された型試合に参加し、文久元年に六所宮で行われた近藤勇の四代目襲名披露では赤組中軍の衛士を務めたのである。そして十一月に、病名は不明だが、大病を患ったと伝えられているのだ。近藤勇とともに出張教授に勤んだり、石田村に居住しながら、江戸の試衛館道場にも顔を出すような日々だったと思われる。このころの土方歳三は、「身長五尺五寸(約一六七センチ) 眉目清秀にして頗る美男子たり」(『両雄士伝補遺』)と描かれている。因みに私よりも土方歳三の方が数センチだけ身長が高い。この時代に一六〇センチ超えているのは身長が大きいと思われるのである。

文久二年十二月、幕府は庄内出身の清河八郎の建言により浪士組結成のため、浪士の募集を開始した。翌年三月に予定された將軍・徳川家茂

の上京に先立ち、関東で集めた浪士を京都に送った。同地に横行する反幕派浪士を取り締まらせるためである。試衛館にもその報せが届き、近藤勇はこれに加盟することを決意したのである。このときの試衛館には、文久元年頃より食客となっていた神道無念流の永倉新八、同二年から出入りするようになっていた北辰一刀流の藤堂平助、種田流槍術の原田左之助がいたのである。また、事情により年末に江戸を出奔した斎藤一も試衛館の門人であった。原田左之助はおそらく、斎藤一と入れ替わるようにして試衛館に現れたものと思われる。浪士組の噂は二種類あり、まず土方歳三は「三日前に江戸から言ってきた話では、文武両様の物であれば最高で百五十石から二百石まで、一通りの者ならば五十石を下されるそうです。もしお心当たりの方がおられれば、お聞かせ下さい」と記し、次に「日野の井上源三郎によれば、諸侯の御上洛のお供として、ひとり当たり三十俵二人扶持が下されるそうです」（意訳）と続け、「まずは、お年玉として申し上げ奉り候」と結んであるようだ。お年玉と形容する諧謔趣味がいかにも歳三らしく、微笑ましいが、実はこの情報が歳三の運命を大きく変えることになったのだ。歳三とともに井上源三郎も加盟し、彼らは浪士組の一員となって上京することとなる。出立前の一月かねて俳句を嗜んでいた歳三は句集を編んだのである。それが『豊玉発句集』である。

### 京都へ行く土方歳三

浪士組の出立に先立って、浪士たちは小石川の伝通院の塔頭・処静院に集合を命じられたのだ。歳三らが、後に京都で活動を共にする水戸浪士の芹沢と出会ったのはこのときであった。その同志に新見・平山・野口・平間があり、全員が神道無念流の遣い手で、姫路出身の平山を除いては水戸の浪士だった。処静院では道中の諸注意が与えられるとともに、浪士組の編成が発表されたのだ。各隊はおおむね三十人で構成され、そこから三人の小頭が選ばれ、近藤勇は六番の小頭の一人となり、歳三・山南・沖田・永倉・藤堂・原田、それに平山・野口・平間が所属したのである。芹沢と新見はそれぞれ三番の小頭となり、新見の組には井上が配された。一行二百三十余人は二月八日に江戸を出立し、中山道を京都へ

と向かったのである。その道中の出来事で清川の盟友の石坂周造が近藤勇に変わって六番組頭となった時期がある。その事情を、石坂は次のように語り残している。「近藤は私たちの同志で、京都に行くときには隊長を命じた。だが、その挙動が尽忠報国には見えなかった（清川派では）彼を除こうという相談もしていた。そこで説論すると、近藤曰く「私よりもよりそういう精神ではないが、自分の隊には異論を唱える者がいる」と。私もその隊中に土方歳三や藤堂平助などの悪者がいるのを知っていたので、その隊を預かることにした。どうしても、彼らが勤皇家でないならば、天誅を加えよう。ということでも入れ替えを実施した。……（意訳、『史談会速記録』）京都到着後、近藤は「道中のときから清川派とは異論があった」と手紙に記しているが、石坂に糺された場面では門人のせいにしたようであった。そのために、歳三と藤堂は「悪者（わるもの）」とされたのだ。尊王攘夷はこの時代の共通認識であったのだが、歳三らが佐幕的な姿勢だったと思われるのだ。しかし、歳三と藤堂の軌跡や信条からすれば、二人が一蓮托生の仲とは言いがたく、にもかかわらず、石坂はあえて二人の名前を挙げているのだ。ということは、石坂に「両名は、六番組の中で序列下位の者」という潜在意識が働いたと思うのである。六番組最下位の平間は、芹沢の家来、弟子のような存在であり、近藤派では最年少の藤堂が最下位で、歳三がブリービーの位置づけとなるのだ。実は悪者には「教養がなく程度の低い者」という意味もあり、勤皇や佐幕論の前段階で石坂は「浪人（武士）でもない者が」という意識を抱いていたのかもしれないのだ。藤堂は大名・藤堂家のご落胤というが、それは噂にしか過ぎず、実際は出自不明の人物である。浪士組内の格差意識が悪者発言や歳三の序列の低さに繋がった可能性はあると思われる。いずれにせよ、農民時代や奉公時代、浪士組時代の歳三は、今のようない歴史上の人物になるような身分や階級の高い人間ではなく、無名の軽輩扱いであったのである。

### 新撰組副長土方歳三

文久三年二月二十三日に上京した浪士組は、洛西壬生村の民家等に分

宿するが、このとき近藤組が宿舎としたのが八木源之丞方の離れ座敷である。浪士組の首謀者である清河八郎は入京後、彼らを攘夷の先兵とするため朝廷に建言し、その許可を得たのだ。この声明を清河八郎が発表したとき、近藤は「朝廷の命令を幕府が受け、幕府が浪士組に東帰を命じるのであれば従うが、清河からの命令は受けない」と強く反発し、芹沢一派が同調したというのだ。もとより歳三もその一員である。この対立点を引き金として、両グループの関係は極度に悪化し、近藤は清川派幹部の梟首を企てたが、計画は失敗した。そして、歳三らは芹沢一派とともに反対し、三月十日に、彼らは連署して京都守護職・松平容保宛てに京都残留の嘆願書を提出したのだ。「残留の願いが叶わず、浪々の身となりましても、天朝（天皇）・大樹公（将軍）の御守護と攘夷を行う決心です」と記し、京都市中の警衛・見廻りを願ひ出たのである。浪士組の江戸帰還が三日後に迫るタイミングで、直前まで帰還か、残留かで悩んだ末の結論だったのだ。残留希望浪士は、芹沢、近藤※、新見、粕谷、平山、山南※、沖田※、野口、歳三※、原田※、平間、藤堂※、井上※、永倉※、斎藤※、佐伯、阿比留の十七人である。（※は近藤一派）この連名リストは嘆願時点の序列が反映されたもので、単なる姓名の羅列ではない。また、浪士組には未参加だった斎藤と佐伯が新たに加わっているが、遅れて合流した可能性が高いのである。近藤とともに残留したのは、試衛館の直門（独身者）と食客であり、リストでは全般に直門が食客よりも上位を占めている。それに伴って、歳三の序列も相対的にアップしている。なお、天然理心流門人の中でも三番組に属した沖田林太郎、中村太吉らは妻帯者だったので、江戸帰還が決まったのである。長期間、家を空けられないという事情があったようだ。因みに近藤も妻子持ちである。一方で、芹沢一派の七人は芹沢、新見、粕谷、平山、野口、平間、佐伯であり、近藤を除くと序列の上位を占めているのが特徴である。因みに阿比留は病気のために残留した者で、四月に病死している。浪士十七人が会津藩に提出した嘆願書は、二日後（三月十二日）には聞き届けられたのだ。そして、殿内・家里兩名が募った公式の残留希望者七人も決まり、十五日に会津藩で残留浪士合計二十四人のリストが作成された。芹沢、近藤、新見、根岸、山南、佐伯、歳三、沖田、井上、平山、

野口、平間、永倉、斎藤、原田、藤堂、家里、遠藤、殿内、清水、粕谷、神代、鈴木、阿比留である。しかし、仲良く一緒のグループとして活動していたわけではなく、芹沢・近藤派連合の標的とされたのが、殿内・家里派であった。残留決定から約二週間後の三月二十五日に京都四条橋で旅装の殿内が近藤一派に闇討ちにされ、もう一人の家里も、近藤派によって、一か月後に無理やり切腹させられたのである。残る根岸らはパニック状態になり、伊勢参りと称して京都を離れ、江戸に逃げ戻り、かくして短期間で殿内・家里派は壊滅し、他にも脱走者などがあり、残った浪士は十五人、芹沢派六人と近藤派九人である。彼らは壬生の八木邸と前川邸を引き続き旅宿とした。そして松平肥後守様御預かりの「壬生村浪士、壬生詰合浪士、京都壬生役浪士」などと称したのである。いずれも地名が織り込まれているのは、住所不定の浪人ではないことの証である。また上洛中の井上松五郎は『日記』の中で「四月早々に壬生を訪れ、精忠浪士から酒をご馳走になった」と記している。この「精忠」こそが、彼らの思想を物語っているのだが、通説では「誠忠」（天皇への崇敬の念）の意味とする。後に新撰組の隊旗に掲げられた「誠」も、誠忠に由来するので、確かにその一面もあるのだが、単に精忠を誤記と片付けてもならないのだ。というのも、当時の志士にとって、精忠は尽忠報国と一体のフレーズだったからである。

創設メンバーに東国出身者が大半で、京都町奉行や知縁などをたどり、浪士組募集と同様に道場主などに対して「一衆参加」を働き、多少の前後はあるが、大坂の道場主では柔術の松原忠司、刀槍術の谷三兄弟などが加盟したのである。近藤派だけが隊士募集に汗を流し、芹沢派は遊行費を捻出するために金策ばかりであったのだ。しかし、必ずしもそうではなく、芹沢暗殺事件までは、圧倒的に芹沢派が優勢だったので、ハ芹沢派⇨京都、近藤派⇨大阪⇨という募集の地区割りを実施した、と思われる節もあるのだ。また、壬生浪士には金が無く幕府から会津藩経由で給与や活動資金を渡されるのだがタイムラグなどがあり、会津藩は困窮する壬生浪士組に一時金を渡す。その金で揃いの着物を揃えるのだ。その羽織が、新撰組のトレードマークというべき山形模様の「ダンダラ羽織」である。それでも運転資金は不足する。四月二日に壬生浪士七人

が豪商を訪れ、最終的に百両の金策に成功するのだ。「私どもが国事を周旋する雑費として借用致します」と書かれた借用書には、野口、永倉、沖田、歳三の四人が連署し、保証書には新見、近藤、芹沢が連名で「尽忠報国の浪人と偽る者が、金の無心（押し借り）を申し入れてきたときは、私どもが対応します」という趣旨が記されたのである。この文書からも、当時の歳三の位置づけが垣間見られるのだ。決して高いとは言えないのである。以降、壬生浪士組は大坂の鴻池家などで、資金調達を図るようになるのだ。四月は事件の連続である。まずは、十六日に松平容保への上覧試合が開催された。剣術、棒術、柔術の武芸稽古を披露するのである。歳三は藤堂とともに最初に行った。

六月のはじめに、芹沢、近藤を筆頭とする壬生浪士十人が、大坂に不逞浪士の取り締まりのための出張をしたのである。その時に大坂相撲の力士と乱闘騒ぎになるのだ。このとき土方歳三は京都に残っていた。以降、芹沢は遊郭などでも乱暴狼藉を働き、凶暴性を發揮していくのである。八月十二日の夜、三十六人の壬生浪士を率いた芹沢は、京都の生糸商・大和屋の土蔵に焼き討ちをする。その時近藤派十数人は大坂相撲との和解成立によって催しされた「札相撲」の興行を行っており参加はしていない。八月十八日に京都を揺るがす一大政変が勃発する。この政変で壬生浪士組五二人は、袖口が白の山形模様となっている浅黄色の羽織を着用し、誠忠と書かれた騎馬提灯を持って出陣したのである。隊士の島田によると、この出動時に「新撰組」の隊名を朝廷から賜ったのだ。もとは会津藩にあった組織名で、「諸芸に秀でた武士の子弟」で構成されたという由来がある。以降、壬生浪士組は新撰組と称して、三日後には正式に京都市中見廻りの任務を与えられたのだ。そして、組織を局、隊長を局長と称するようになったのだ。私自身、このことで驚いたのは、「新撰組」という隊名を会津藩からではなく、朝廷から頂いたということである。会津藩にもともとあった組織名と知っていたのでずっと会津藩から貰ったと思っていたのだ。また、この時代的にも考ええると幕府と朝廷の間には様々な藩が作っている溝という物もないので、このように新撰組という隊名を朝廷からいただけたと思うのである。後、少し時代が下ると幕府が会津藩からなくなったであろう。八月十八日の政変後、九

月十六日に暗殺されるまでの約一ヶ月は芹沢の動向は、よくわかっていない。芹沢派の新見が九月十三日に死亡する。『新撰組顛末記』（永倉新八）によると勝手に金策したことを禁令違反に問われ、近藤派が遊女屋で詰め腹を切らせたのだ。『新撰組始末記』（西村兼文）では、「勇の意向に感じないので、それを憎しみ暗殺した」とされる。この二つの説は新見が芹沢派という前提に立つもので、近藤派による粛清説とも言い換えられるものだ。ところが、『浪士文久報国記事』（永倉新八）では、全く異なる説が載せられている。「新見の乱暴が激しく、芹沢や近藤が言っても聞かないので、切腹することにした。しかし、新見は、京都に宿泊中の水戸浪士・吉成常郎（常次郎）のところで、またもや乱暴を働き、やむなく切腹した」（筆者訳）。新見は乱暴な性格のゆえに、芹沢によって序列を大きく下げられたのだ。新見は芹沢からも見放されていたのだ。素行不良の自滅である。

新撰組が会合を開いたのは、十六日の夕方であった。新見切腹の三日後で政変時の出動に対する慰労会である。そのとき歳三も同行したというのだ。歳三の狙いは、芹沢らを泥酔させることにあった。晩秋のそぼふる雨の夜の出来事である。犯行を行ったのは歳三、沖田、山南、原田である。彼らは二手に分かれて犯行を行ったのだ。まず山南と原田が平山の寝首を斬る。続いて歳三と沖田が、芹沢と妾のお梅に屏風ごと刀を突き立てる。その間、平山の馴染みの吉栄はたまたま便所にいたので難を逃れ、平間と平間の馴染みの糸里は襲撃に遭わなかった。即死者は三人で、突然の出来事に、平間は下帯だけの姿で刀を抜き、「どこへ行った！」と刺客を探していたが、その夜の内に脱走した。これが暗殺事件の概要だが、刺客には諸説あり、芹沢と親しかったために実行犯から外された永倉は、「歳三、沖田、藤堂、御倉」の四人を挙げている。残る野口も十二月二十七日に切腹となり、新撰組は近藤グループが全権を掌握することになるのだ。

新撰組不逞浪士による非合法活動の摘発に乗り出す。京都守護職のミッションに沿った司法権、警察権の行使である。従って、浪士や不審者を即殺害することはありえないのだ。現在で言えば、新撰組は警察の役割であり、不逞浪士の殺害が目的ではない。ちなみに現在の警察は①

交通・生活安全警察、②刑事警察(司法警察)、③公安警察に大別されるが、新撰組はその全機能を兼ね備えていた。①については、島原遊郭で火事騒ぎがあった時に現場整理を行った記録が残っている。②は犯罪捜査と逮捕であり、不逞浪士の召し捕りである。③の公安警察の職務は、反政府活動への警戒、(情報収集、捜査)であり、機動隊の運営や皇族などの警衛の担当である。新撰組の活動自体は町奉行同心と同じである。永倉の遺品から鉄製の十手が発見されているし、また近藤の実家でも十手が目撃されている。この事から新撰組は十手や取り縄といった捕物一式を備えていたと推測が可能である。様々な場数を踏みながら、新撰組は次のような探索・捕縛手法を構築していくのだ。不逞浪士が入れば召し捕りに向かい、ひとりも逃さない。それが職務の本文である。市中見廻りを行い、人別を改め(浮浪の徒、無宿人のチェック)を徹底する。潜伏場所が判明すれば、抜刀した浪士が家の表裏を固め、同時に踏み込む。梯子を用意して屋上に登り、屋根をつたって逃げる者を逮捕する。屋根と天井との隙間も、槍で突いてチェックする。これが新撰組の市中見廻りのやり方である。

幕府からの給料も京都守護職経由で「月額一人あたり金三両」が支給されたと同じころ烏合の衆を律する「禁令四箇条」も制定されたという。出身がバラバラで、身分格差のない浪士集団を統率するには、どうしても掟が必要となった。これが有名な「局中法度」の原型にあたり、「士道に背くこと、局を脱すること、勝手に金策すること、勝手に訴訟を取り扱うこと」の四つが禁止されたのだ。この四つと「私闘を許さず」を加えたものが「局中法度」で違反した場合は、切腹処分という内容である。副長としての歳三の仕事は、副長筆頭の山南が療養のために、内部統制の要は副長次長の歳三の仕事であったのだ。副長助勤は副長の指示命令系統下に入り、平時は市中警備や人別改めを担当、不逞浪士の捕縛の出勤。戦時には組頭として各組をまとめる。そのほかにもスタッフ職(諸士調役と勘定方)も副長の管掌下である。組織図が変化しても、局長の下の副長というポジションは変わらず、その下には様々な役職があった。政変から十ヶ月近く経った元治元年六月一日に不審者の尋問を行ったところ、「火薬を所持した長州系労使が京都に潜伏中で、公武合体派の

中川宮や会津藩主を討ち取り、大風を待つて京都市中を焼き払う」という告白を引き出した。五日になって、新撰組は京都守護職に「浮浪の潜伏場所を捜索したところ、約二十か所に及びます。私どもだけでは捕り洩らす懸念もありますので、御家(会津藩)からも人手をお出しく下さい」(筆者訳、『会津藩日記録』)と依頼したので。現実には探索は無理な話でも、近藤や歳三にとっては組織再生のチャンスとの思いが強かったのだと思われる。同日の早朝に副長助勤の武田以下七人が、四条で炭薪商を営む榊屋喜右衛門こと古高俊太郎を逮捕して、壬生屯所に連行したのである。家宅捜査を行うと、武器・弾薬や密書が発見され、古高は厳しい拷問に遭う。『新撰組顛末記』によれば、歳三が古高の足の裏に釘を差し、ろうそくを立てて火をつけたというのだ。その結果、自らの立場は「武器保管場所の提供者に過ぎない」としたものの、古高は過激派浪士による謀反計画の全貌を供述したのだ。「一気に勢力を挽回するため、台風の日を選んで京都御所に火を付け、急を聞いて参内する中川宮や松平容保を、途中で殺害する」と、先の不審者の告白が裏付けられたのだ。新撰組からの急報を受けた京都守護職の松平容保は大規模な「浮浪狩り」を行うために京都所司代、京都町奉行などに緊急出動を要請するので。一方では古高逮捕を実体長州藩邸の過激派浪士らは、奪回策などを競技するために、緊急に三条小橋の旅宿の池田屋へ集まることになる。同日の昼に、出動準備に入った新撰組は、分散して集合場所の祇園会所へ向かうのだ。出動したのは三四人で、壬生屯所には山南以下数人が残った。山南の病気もあるが、屯所襲撃に備えるためだ。京都守護職が決めた集合時間は夜の九時だが、時間が近づいても諸藩兵は出動に手間取り、姿を現さない。やむなく新撰組は隊士を三分して、浪士が集まる場所を入手していいのでしらみつぶしに捜索を開始するのだ。その内訳は近藤隊が十人、土方隊が十一人、井上隊が十三人である。手槍を持って鴨川の両サイドの通りを四条から三条にかけて北上するのだ。そして不審場所をピンポイントでチェックしていく。午後十時頃、近藤隊が三条小橋の池田屋に差し掛かるのである。中では浪士が酒宴を催している様子なのだ。そこで隣人に問取りを確認し、隊士の配備を行うのだ。彼らは鎖帷子を着込み、鉢鉄を巻いている。と同時に諸士調役が使番と

して、土方隊や井上隊への伝令に走ったと思われる。沖田、永倉、藤堂の三人を引き連れた近藤は、池田屋の中に入ると、主人に「旅宿御改め」と告げる。主人は驚いて二階に上がり、それを近藤と沖田が追うと、二十人ばかりの浪士が刀を抜いて立ち上がる。そこで、近藤は「御用御改め、手向かいいたすと容赦なく斬る！」と大きな声で一喝する。あくまでも新撰組の目的は不逞浪士の（逮捕↓尋問↓自供）にあるが、抜刀した浪士が襲ってきたので、殺害へと切り替える。近藤らに切り立てられた浪士は、表口、裏口から逃げ出そうとする。表口を固めていた残りの近藤隊が、宿内に入って浪士と戦う。駆けつけた井上隊も屋内の戦闘に加わり、続いて土方隊は屋外を固め、逃げ出す浪士の捕縛に尽力した。さらに付近一帯を、遅れて出動した京都守護職などの諸藩兵が固めるのだ。約一時間半におよぶ捕物騒動の結果、会合に集まった浪士は三四人（長州、土佐脱藩など）を、尋問は殺害または逮捕したのである。うちわけは即死六人、重傷後の死亡者五人、逮捕者三二人と伝えられる。但し、脱出に成功した浪士も数人いる。一方、新撰組では即死者一人、重傷後の死亡者二人、重傷一人（藤堂）、軽傷二人（沖田、永倉）を出した。ここで凄いのは近藤隊の隊長で新撰組局長の近藤は前線で闘っていたのに怪我をした記録がないことである。池田屋での新撰組の成果は、周到な準備、的確な状況判断、リスクに対処する勇氣、組織マネージメントの賜物である。また鉄砲などの火器は使用されず、屋内では刀が、屋外では槍が威力を発揮したことになるのだ。圧勝の要因は、斬り込んだ近藤の力量が大きい、後詰に廻った歳三のサポートがあったからこそ、大量検挙が実現できた。池田屋事変の二日後には幕府は京都守護職経由で新撰組へ総額六百両の褒賞金目録を与えたのだ。近藤へ「金十両、別段金十両」、井上隊へ「金十両、別段金七両」、土方隊へ「金十両、別段金五両」と、論功行賞は各隊の殊勲に応じ「上等、中等、下等」の三段階評価とされた。新撰組を遇するには、浪士集団なので知行や扶持の支給はありえず、現金支給となるのだ。その意味で、新撰組は幕府の備兵部隊となるのである。池田屋事変の知らせを受けた長州藩は、幕府との武力対決、全面戦争へとエスカレートしていくのだ。その導火線に火を付けたのが、新撰組と言ってよい。朝廷への請願と称する長州藩は

「尊皇攘夷」「討薩賊会奸」の幟を翻して、六月中旬から海路をたどって大阪へ、さらに京都近郊の伏見、山崎へと進み六月下旬に陣を張った。新撰組は郊外の九条河原へと出陣した。新撰組にとっては、前年の政変以来の出陣だが、本格的な参戦は初めてである。警察組織が軍隊に変貌する一瞬である。赤字に白く「誠」の一字を染め抜いた隊旗を掲げ、臨戦体勢を整えた新撰組は、局長の近藤、副長の歳三、副長助勤（組頭）の永倉、藤堂、斎藤、井上、軍事掛りの武田観柳斎、諸士調役の山崎など、小荷駄の尾関などである。このとき、「病気のために引き込んでいる山南に代わって歳三が」、「同じく沖田に代わって永倉が」（『浪士文久報国記事』）と記され、副長、副長助勤の次席がそれぞれ上位の職責を代行したことが判明する。京都郊外に分散した長州軍千六百人に対して、幕府側は撤兵を求めるが、長州軍は従おうとはしない。合戦が始まらず対陣が長引くのだ。実際の戦闘は短く、対峙期間は長かった。長州軍が動き出したのは七月十八日のことで、翌日、京都御所をめぐる戦い「禁門の変」が起こるが、わずか一日で長州軍は敗走したのである。市中の砲声を聞いた新撰組は、北上し御所に到着したが、そのころには大勢が決していたようだ。主に新撰組が従事したのは、敗走または潜伏する長州兵の追撃であり、二十日以降も残党狩りを行ったのだ。結局、新撰組は手柄を挙げるチャンス逃してしまった。新撰組にしても歳三にしても合戦に参加できないということがかなりショックでむず痒い気持ちになったと思われる。大勢がいくつかの場所を戦っていたら、新撰組にも戦うチャンスがあったのに、一つの場所で長州が戦ったことにより、他で待機していた新撰組は何も出来なかった。新撰組は自分の持ち場にはいたので、新撰組が悪いような事は何もない。ただ、手柄を挙げられなかっただけである。

池田屋事変の後、江戸での隊士募集を行った。近藤には「兵は東国に限る」という思いがある。先発として藤堂が江戸に下り、事前準備を行うのだ。具体的には勇門下（天然理心流）と伊東道場（北辰一刀流）への勧誘である。募集の結果、新規加入者は三三人で、そのうちの十三人が勇の呼びかけに応じた者で、天然理心流門人からは五人が参加したのだ。門人では、大石欽次郎、近藤芳助、横倉甚五郎など、他にも安富才

助もこのときに加入している。後に歳三の腹心となる人物である。残る十人は伊東甲子太郎の一衆で、伊東の実弟の三木三郎、篠原泰之進、加納鷲雄などである。これらは藤堂の誘いである。行軍録作成の三か月後、慶應元年（一八六五）二月の事である。ある事件が起きたのである。江戸以来の同志でナンバー2の副長の山南が二十二日に局を脱走したのである。早速、沖田が追跡し、翌日、壬生屯所に連行された山南は切腹を命じられたというのだ。しかし、その背景に何があったのか、判然としてないのが現実である。また、「脱走した」というのも、永倉の記述や隊士の噂にあるだけなのだ。本当にわかっているのは切腹の事実だけであり、屯所で療養中の者が、どのような方法で抜け出すことができたのだろうか？まして大幹部の身である。脱走の噂を聞いた八木為三郎（屯所提供者の子）も「自分達で新撰組をこしらえておいて脱走するとも思えませんし、どうもおかしいことです」（『新撰組遺文』）と語り残しているのだ。切腹の理由についても、交流があった多摩の後援者が「故ありて、昌宜（勇）それ（山南）を自尽せしむ」（『両雄士伝』）と記すだけである。不可解な事件だけに諸説がある。「脱走」の理由は、近藤と歳三との確執、『新撰組始末記』（西村兼文）によれば、近藤勇は山南を疎外する傾向があり、そのころ進められていた西本願寺への屯所移転に反対で対立するのだ。移転反対を唱える山南は、意見が取り入れられず、「私はいやしくも副長を努める立場だ。その発言が通らないのは、近藤に対する土方らのこびへつらいが原因だ」と憤慨し、切腹したとするのだ。元来が反幕派の伊東に共鳴したためともされるのだ。切腹後に伊東が「山南の割腹を弔って」と四首の和歌を詠んでいるのは事実だが、伊東と結んで、近藤と土方体制に反発したわけではない。思想の違いは、ハ勇⇨佐幕論者、山南⇨勤皇論者⇨という対立説だが、あえて山南が近藤を否定するほどの違いはない。近藤と歳三との確執を自害説と信じるべきであろう。療養の長期化に伴って職務には復帰できず、結果として名目だけの副長と化したのだ。疎外感、立場のなさ、自分への苛立ちが山南を自害に追い込み、いわば憤死させたのだ。動揺を最小限に抑えるために近藤と歳三は、禁令違反「脱走による切腹処分」と発表したのがある。山南切腹事件によって、歳三は名実ともにナンバー2の座に就

いたことになるのだ。私自身も山南の脱走には疑問に感じることも多くどうして切腹になったのかわからなかった。私的に考えていたのと近藤グループを裏切り伊東派に入り、新撰組を伊東グループの新撰組に変えることが嫌なのと昔の仲間を裏切らずに死ぬ方法を考えたとときに脱走と思ったのではないかと長い間、思っていたのである。

江戸での第二次隊士募集の責任者が歳三に決まる。京都の政情不安に鑑みて、近藤は歳三に東下を依頼したので。三月下旬に副長助勤の斎藤と伊東とともに京都を立った歳三は、四月初旬に江戸に着いたのだ。当初は沖田も同行予定だったが、「御用向き繁多（公務多忙）」のために断念した、と沖田は手紙に書いている。歳三到着を聞いた佐藤は、日野から市谷柳町の旅宿（近藤宅）を訪ねているのだ。二年ぶりの再会をしたのだ。また歳三は、佐藤ともに日野へ赴き、多摩の後援者とも会っている。募集の結果、五四人もの新規加入者を集めたのだ。池田屋事変によって、新撰組の知名度は著しく高まった。このとき、吉村貫一郎（後に諸士調役、宮川信吉（近藤勇の従弟）らが参加したので。これよりは少し後だが、大政奉還の一月前ほどの九月中旬に、第三次隊士募集を行うために、歳三は組頭の井上は江戸へ向かう。御陵衛士の分離に伴う補充が目的だ。隊士の募集面接は近藤邸で行われ、応募隊士二十人は京都に向かうのだ。

新撰組は日本刀で戦っているというイメージが強く大砲や鉄砲を使っていないというイメージを持った人が多いとは思うのだが、歳三によると、すでに一年前（元治元年十一月）から壬生で「毎日、局一同は西洋筒にて砲術訓練を行っております」のことが、実態が不明なのだ。西洋式訓練については不明だが推進はされていたのだ。幕府は文久二年（一八六二）に陸海軍を創設し、直轄舞台である徳川軍の軍備強化に着手したのである。従って新撰組の西洋式訓練は、その端境期のタイミングとなるのだ。そして歳三が西洋式訓練の推進者だったことは、『取調日記』からも間違いないのだ。とすると、屯所移転問題には、隊士の急増対応に加えて、訓練場の確保という一面も存在したと推進されるのだ。西洋式化を急ぐ歳三に対して「西洋不服」を唱えたのが武田であり、そのために後に脱走するのだ。従って、本当に西洋式訓練を新撰組でされていたの



かが不明なのである。

慶応二年十二月の下旬に孝明天皇が崩御する。勤皇派に傾斜する伊東派は、三月に御陵衛士を拝命して新撰組からの分離を画策するのだ。分離後が俗にいう「高台寺党」である。ところが分離に際して、近藤と歳三は間者として斎藤を送り込んだのだ。その結果、斎藤から「伊東による勇暗殺計画」の通報があり、近藤は伊東を呼び出して暗殺する。そして、十一月の十一日には伊東が土佐人と口論になり深手を負ったので駕籠で迎えにきてください、また「新撰組が見張り番をしています」との情報がもたらされたのだ。御陵衛士の面々も「実行犯は新撰組」と察知していた記述がある。しかし、加害者が新撰組とは、伊東と同様に露ほども疑っていない。この油小路の変で、御陵衛士は伊東以下四人が殺害されたのだ。新撰組の出動者は伊東殺害の大石、宮川、横倉に加えて、副長助勤の永倉や原田などである。この変で江戸からの仲間だった藤堂を殺害したのである。

年が明けて、明治元年（慶応四年、一八六八）一月元日。大阪城の徳川慶喜は兵を率いての上京を決意するのだ。二日に薩摩藩の罪状を列挙した「討薩表」を掲げ、徳川陸軍、会津藩兵などの一万人から構成される旧幕府軍は、鳥羽街道、伏見街道の二方面からの入京を企て、翌三日には通行を阻止しようとする新政府軍との間に戦端を開くのだ。これが鳥羽伏見の戦いである。新撰組は伏見奉行所を守っており、歳三が指揮した新撰組の陣容は、隊士百五十人に加えて、歩兵五十人であった。四日に新政府軍に「錦の御旗」が掲げられた。その結果、旧幕府総崩れとなり、大阪へ敗走を重ね、新撰組もまた七日に大阪城へと入った。この戦闘で、新撰組の戦士者は二十人を数え、脱走者も十数人に及んだのだ。土方歳三にとって、多摩以来の盟友の井上も銃弾に当たり死亡を遂げた。同じく副長助勤の山崎も銃創で重症を負い、江戸に向かう船で戦死した。脱走した諸士調役の吉村は脱藩した盛岡藩の大阪屋敷で切腹したのだ。約十日後に江戸に帰還するのだ。

### 北上する土方歳三

江戸に帰還した新撰組は「甲州鎮撫」の計画を練り、勝海舟に「甲府

に行つて、徳川家の主旨を説明したいと思います。必ず恭順の趣意は守り、暴動することはありません」と申し出て、許可を受けるとともに軍資金を受領したのだ。なお、鎮撫とは「反乱の鎮圧取り締まり」の意味である。新撰組は徳川陸軍の一部隊で、軍事取扱（徳川軍最高責任者）に昇進したのだ。江戸帰還後、約一か月半経った後、負傷者も回復した新撰組は二月下旬に甲州に諸士調役に大石を探索として先発させるのだ。本隊も二月三十日に鍛冶場屯所を出発したのだ。隊名は甲陽鎮撫隊と名乗ったのだ。新政府軍には刺激的な新撰組の名前を、あえて名乗らなかつたと伝えられるが、武器などの荷物運搬に駆り出された近郷の人足の手配書では「新選御組衆」「新選御組鎮撫隊」と記録され、武州では堂々と名乗っていたようだ。他に隊名を「甲府御用鎮撫隊」、目的を「甲州鎮撫方御用」とする資料もあり、徳川家御領の甲府での正規要務を謳っているのだ。このとき、歳三は内藤隼人と改名しているのだ。甲州街道の内藤新宿（東京都新宿区）に由来するのだ。五年前の歳三からすれば破格の出世と名誉であり、隼人は土方家の代々の当主の通称を用いたそう。他には隼太、隼之助とも記録されるが、内藤隼人として北関東戦線で活躍するのだ。一行は日野宿で休憩を取るが、病気を再発した沖田総司は、江戸に戻ることになる。一行は八王子↓小仏峠↓笹子峠↓と進むのだが、五日に勝沼付近に到着した時には、脱走者が多く、総勢百二十人まで減ったのだ。さらに、新政府軍の東山道軍分隊八百人が甲府城代と談判して、戦火を交えることなく入城を果たしたのだ。近藤の命で援軍の要請のために江戸に走る歳三だが「神奈川に向かった土方歳三は菜葉隊に支援を求めろのだが、断られた」と記述されるが、実際に早駕籠で向かった先は江戸で、さらには、容易に援軍の調達ができるはずがないのだ。ところで、永倉によると、戦闘開始の前に、甲陽鎮撫隊の中で軋轢が生じていたようだ。隊士は「応援がなければ、戦いたくない」と副長助勤三人（永倉、斎藤、原田）に申し出るのだ。そこで三人が近藤と歳三に告げると、当惑して「同志を欺く以外にない」とし、「会津藩兵が間もなく来る」と同志に伝えたという。これが、歳三が江戸へ引き返した理由かもしれないのだ。翌六日には勝沼で東山道軍と戦うが、所詮は多勢に無勢で戦局が好転するはずもなく、甲陽鎮撫隊はあっけな

く敗北したのだ。また、永倉と原田は江戸に引き上げ、兵を募ると言い、隊を離れるのだが、ほどなくしてこの二人の二統は新撰組を脱走し、そして江戸から引き返す歳三は、途中で敗走する近藤に出会い江戸に引き上げる。

移動してきた部隊を「甲陽鎮撫隊」と名付けると、甲陽鎮撫隊は味噌屋に本陣を構え、歩兵などは近隣の寺院に分宿させたのだ。近藤と歳三は、流山で歩兵に洋式訓練を施そうと考えたようだ。野外訓練中に不意を突かれ、本陣を包囲されたのだ。東山道軍は、鎮撫隊の解散と隊長の板橋総督府への出頭を求めたのだ。割腹を決心する近藤勇は、少しの猶予をもらい、本陣の二階で隊士三、四人と協議したのだ。席上、歳三は「ここで割腹するのは犬死です。運を天に任せて板橋総督府へ出頭した上で、あくまで鎮撫隊を主張し、説破するのが得策でしょう」と言った。この意見が通り、近藤の出頭が決まったのだ。また永倉の伝聞では、次のように描写されている。もはや勝ち目がないと切腹しようとする近藤を歳三が差し止め、「切腹はまだ早すぎます。偽名を語って歩兵頭と名乗り、『現在、歩兵が諸方に散乱しているのは、(新政府軍に) 恐れ多いことだ。その歩兵を呼び戻すつもりで、当初に出張してきた』と言えば、きつと申し開きが立ちます」と語ったのだ。結果、近藤は切腹を見合わせたといい、しかし歳三にとって、これが近藤との永遠の別れとなった。翌四日、新政府軍は、鎮撫隊の武器を募集して引き上げたのだ。両長召抱人の田村によると、士官(新撰組隊士)と歩兵の合計百人が、その隙に逃げだしたのだ。彼らの目指す地は会津の地で、勘定所筆頭の安富が、歳三の代行を務めて一行を率いたのだが、ここでも数人の隊士が姿を消した。安富には、近藤芳助、立川主税らが同行した。しかし、奥州街道は新政府軍の東山道軍が北関東まで進駐して通行が出来ないのだ。甲州敗走後、斎藤率いる先発隊(傷病者)が出発を急いだのも、このような背景がある。利根川や鬼怒川会津藩の船で北上先発隊は戸坂河岸(宇都宮以外)で上陸して白河を目指したようだ。安富一行は水路と陸路を辿って、浜通りから会津入国を果たそうとするのだ。現在でいう八千葉県→茨城県→福島県への太平洋側を北上したが、当時、新政府軍は奥羽諸藩に会津藩追討を命じたので、道中の通行は容易では

なく、奥羽越列藩同盟の結成は、まだ先のことであり、安富らは逃避行に近く、苦労を重ねる一行は、八浜通り→間道→奥州街道→間道」と福島県中央部を横断して、会津に入り、そこで先発隊と合流を果たすのだ。一方、新撰組本隊を安富に託した歳三は、近藤の救出に奔走する。

四月三日の夜に隊長付の相馬主税を連れて流山から江戸に向かい、四日には安富一行と別れた島田、中島、沢らが軍資金を持参して歳三と落ち合うために江戸へ入る。四日、徳川家首脳の大久保一翁と勝を訪ねた歳三は、勇解放の助力を願うのだ。「海舟日記」には、「土方歳三来る、流山顛末を云う」と記されている。勝との縁は、甥の三浦啓之助を新撰組が預かったときからである。近藤は板橋総督府に移送されていたが、「賊軍隊長は近藤勇ではないか?」という情報が断片的に入りだすのだ。「大久保は元新撰組の頭で、本名は近藤勇と言います。江戸では武術の師匠をしていたそうで、京都や甲州の戦争に参加し……流山に来る前も毎日大砲の訓練をしていました」と自供していたのである。そこで五日に急遽、大久保大和の確認作業が実施されるのだ。現代風に言うと、警察の「面通し」である。その作業を行ったのが、奇しくも御陵衛士残党の加納と清原だったのだ。加納の談話によると、下見をすると勇本人だったのである。そこで座敷に入って、「大久保大和、改め近藤勇」と声をかけたのだ。そのときの様子を「近藤は実にエライ人物でしたが、そのときの顔色は今でも目に付いていますが、はなはだ恐怖の姿でした」と、回想しているのである。このような最中に、書状を持参した相馬が身柄を拘束され、流山から勇に随行した野村も、先に逮捕されているのだ。訊問に際して、相馬は「笠間藩脱藩で近藤の兵隊となった者で、詳細は知りません」と押し通し、勇も「昨今、召抱えた者で、何事も知らず、何卒助命ください」と願い出たので、両名は勇の処刑後に旧藩お預けの身となるのだが、彼らは脱走して江戸に潜伏する。近藤の処分は、八土佐藩の強硬派、薩摩藩の寛大派が対立したのだが、最終処分は土佐藩の主張が通り、斬首と決まるのだ。当初は「京都で引き回しの上、晒し首」の予定だったが、宇都宮城の攻防戦が勃発したために、急遽、板橋で処刑されたのだ。享年は三十五歳で四月二十五日の事である。近藤の首は晒されて、以下の処文書が付けられた。「元来浮浪の者にて、初

めは京都で新撰組の頭を務め、後に甲州、流山で官軍に手向かい、あるいは徳川の内命を受けたなどと偽りを唱え、容易ならざる企てに及んだことは、上は朝廷、下は徳川の名を偽るもので、その罪は数多い。よって死刑に処し、梟首とする。」「(『戊辰間新聞』) この記事から思うことは近藤が新政府によって、朝廷の敵ならまだしも、幕府に対しても敵とされてしまっているのだ。敵対している旧幕府軍の本心を知る事は出来ないので真実は解明されないのだが、このような記事が出た以上、近藤という人物は民衆からしてみると、新政府軍には歯向かい、徳川に対してはも欺こうとしている負のイメージで理解をされてしまったのではないかと思う。四月四日に勝との面談を終えた歳三は、江戸に留まっていた。旧幕府抗戦派と善後策の協議を重ねたのだ。歳三に付き添った隊士の中島は、「土方や榎本らは評議を行い、海軍は軍艦に乗り込み、陸軍は追々脱走して回復の謀を約束した」(『中島登賞書』)と記し、一応の共同謀議があった。しかし、どこまで緊密な連携プレーが図られたのであろうか。旧幕府抗戦派は、盟主を欠いたため、統一行動がとれなかったと思うのだ。この脱走劇をみると、海陸ともに房総半島方面に集中しているのだ。歳三が島田、中島ら六人の新撰組隊士を引き連れて、向かった先は国府台である。鴻の台とも書き、音は一緒である。歳三が参加した背景には、勝の鎮撫要請があったのかもしれないが、やはり抗戦派としての立場だ。「わずかに七人の新撰組で、何ができるのか?」という声が聞こえそうだが、実は歳三を頭に担ごうとする部隊もあったのだ。歳三は解放されるはずの近藤を江戸近郊で迎えようとしていたので、会津に向かった新撰組を追うことはないのだ。近藤の復帰を待つて、関東再戦を企てていたのだ。新撰組を会津に送り込んだのは、隊士と歩兵の負傷療養と洋式訓練を目的とし、最終的には関東戦線に復帰させるつもりだった。結局、近藤は処刑されてしまうのだが、この時点で察知できるはずもない。実は旧幕府脱走陸軍に参加後の歳三は、新撰組とは「個別の存在」と考えた方が分かりやすい面がある。皆無とはいわないが、新撰組を直接指揮するケースは少ないのである。もちろん「新撰組副長」の英名は世に知られているから、周囲も「新撰組」土方歳三と見るし、そういう記述される場合も多い。実際の歳三の軌跡は新撰組のフレーム

を超え、伝習第一大隊長へと出世していくのだ。それは、薩長との戦闘を継続するために、歳三が洋式舞台に傾斜したからと考えてよいのである。歳三に守衛の新撰組隊士六人が付き添ったのは確かだが、行軍中、彼に従ったのは伝習第一大隊(内田などの百数十人)、回天隊(旧幕臣の脱走部隊)、それと伝習第一大隊付属の伝報隊(旧別手組の一部)などである。

旧幕府脱走軍は日光へと行軍を開始する。食糧調達後に「土方兵隊、秋月兵隊合兵」(『立川主税戦争日記』)し、宇都宮を目指す。ちなみに合兵とは、諸隊が連隊を編成することで、組合と表現する場合もある。十九日の朝、三隊に分かれた前軍は宇都宮城を攻撃するのだ。先鋒は歳三が率いる桑名士官隊が務める。この戦闘時に、「城の側を進んだ兵は、桑名藩の他は回天隊が五、六人だけだった。歳三は歩兵が退くのを見ると、『進め、進め』と号令しながら逃げる者ひとり斬り倒した。歩兵はこれに励まされて再び進んだが、血刀を携えた土方歳三が悠々と退いたため、歩兵も退却した」(『桑名藩戦記』)というエピソードが残っているのだ。歳三には同様の話があり、軍律違反者を厳しく処分したのだ。いづれもが、「新撰組軍中法度」を想起させ、烏合の衆や無頼の徒を律するには、見せしめとしての死以外にはない、と歳三は考えていた。特に戦争では、市民に対する乱暴や掠奪などが頻発するが、それも軍律違反となる。新撰組以来、それが歳三の信条となっているのだ。前軍は大砲や小銃を撃ちまくり、城下に火を放った結果、宇都宮城を攻め落とす。城攻めは数倍の兵力や長期な時間を必要とするのだが、それを歳三は一日で成し遂げたのだ。ある意味、惨敗続きの旧幕府軍にとっては奇跡的な勝利であり、戊辰戦争での戦術家の歳三の評価を決定づけたのである。「土方歳三は常野奥羽(常陸、下野、陸奥、出羽)の各所において勇戦、衆目を驚かす。なかならず宇都宮攻撃の働きなど、官軍にも寒胆せしむる程なり」(『新撰組始末記』)大鳥軍は、火の手が上がるのを見て前軍による攻撃と判断し、方向転換し、二十日に宇都宮に到着したのだ。その後、援軍を得た新政府・東山道軍は、二十三日に宇都宮城奪還の戦いを挑むのだ。旧幕府軍は死傷者が続出し、弾薬も撃ち尽くしたので、今市方面「栃木県日光市」へと敗走した。この戦争で歳三は足指

を負傷し同じく怪我をした秋月とともに、今市へ移送された。そのため、隊長不在となった前軍の伝習第一大隊を大鳥に託したが、新撰組隊士の島田は「兵隊は大鳥に服さなかった」（『島田魁日記』）と記録している。翌二十四日、歳三は隊士の中島を日光へ派遣して、東照宮を警備していた八王子千人同心の土方勇太郎を呼んだ。彼は天然理心流の同門であり、歳三は「斬り殺した歩兵が不憫なので、日光に墓石を建ててほしい」と供養を頼んだというのだ。

「その後の新撰組隊士」は、近藤（三十五歳）は四月二十五日に板橋総督府で斬首刑となり、その沖田（二十七歳）は甲州出陣の途中で江戸に戻り、千駄ヶ谷「東京都渋谷区」の植木屋宅で結核の治療に務めたが、五月三十日に病死してしまう。この二人は歳三の元に戻ってこなかった。また新撰組を脱走した永倉は友人の芳賀宜道とともに靖共隊を結成し隊長の芳賀のもとで副長に就いたのだ。同様に原田（二十九歳）も副長となったが、行軍中に江戸に引き返し、彰義隊に参加して五月十七日の上野戦争で戦死したのだ。

四月二十四日、歳三は傷の療養をするため、秋月とともに会津西街道を会津若松へと向かうのだ。奥州街道は通行できず、一行は裏街道をへ今市―藤原―五十里―山王峠―田島―大内宿―会津若松へとたどる。四か月後に会津戦争が起るため、歳三が救援のために来たようなイメージが強いが、目的は傷の療養であり、新撰組先発隊と同様である。旧幕府脱走陸軍は移動旅団なので、十分な医療設備がなかったのだ。旧幕臣の歳三にとつての戦場は、宇都宮、日光である。このとき歳三に付き添った新撰組隊士は、「秋月、土方両公、警衛十余人引き連れ、会津表へ引き揚げる」（『中島登覚書』）と記し、少人数で会津入りした雰囲気を与えている。ところが、清水屋に宿泊中の旧幕臣の望月光蔵は、その時の模様を「陸軍第一連隊の脱走兵は宇都宮で戦って敗れ、隊長の土方歳三（変名は内藤隼人）、副長の内田良太郎、士官の孤田元治に入った」（『夢乃うわ言』）とさながら歳三が伝習第一大隊を引き連れられたかのよう

に描写しているのだ。なぜか、少数と多数の話が交錯しているのだ。他にも「土方歳三は今市から負傷兵を率いて会津へ向かった」とする史料もある。大鳥は、「宇都宮以来、病人が多いので、ケガ人だけは会津に送る手筈を整えた。僻地なので大変困った」（『幕末実戦史』）と記しているのだ。ならば、実際の土方歳三は伝習第一大隊の半隊（内田部隊）及び負傷者、伝報隊、守衛新撰組などを引率して、会津に入ったと考えるべきなのだ。歳三自身もケガしているものの、いわば旧幕府脱走陸軍の小荷駄業務の一環として、負傷兵移送、療養手配を務めたわけで、傷病の癒えた兵は再び戦死となる。繰り返しになるが、旧幕府脱走陸軍は、新政府軍とは異なり、人的な補給・調達が非常に厳しい状態にある。清水屋に到着した歳三の傷は重く立つこともできなかったようだ。しかし、歳三の会津入りに伴い、①斎藤が率いた先発隊（負傷者）②流山から安富が率いた本隊③歳三が率いた守衛組と三ルートをとどった新撰組面々は、ここに合流を果たしたのだ。三月初旬の甲州敗走以来、約二か月が過ぎているのだ。この会津では、山口次郎が隊長に就任したのだ。長年、新撰組の副長助勤を務めた斎藤の改名であり、近藤芳助は「仮の隊長」と書いているのだ。勇が復帰するまでの暫定としたのか、療養中の歳三が山口に代行させたのか、それとも望月の記録どおり、歳三が伝習第一大隊だったことによるのか？ 判然としないが、すべての要素を含んでいたと思われる。この再編成された組織を「会津新撰組」と名付け、総勢は百人強だった。幹部の構成では、①先発隊の山口、久米部②本隊の安富、近藤隼雄③守衛の島田とバランス型人事となっているのだ。ところが、会津新撰組も一枚岩ではない面が浮上してくるのだ。それは「殉ずるものは何か？」「忠義なのか、恩義なのか？」という究極の二択だ。すなわち、旧幕府へ忠誠を唱える土方派と、京都以来の会津藩に恩義を覚える山口派との対立であり、会津戦争の終盤になって表面化するのだ。旅館や温泉で傷を癒した歳三が姿を現すのは七月上旬のことである。このころには、大鳥が率いる旧幕府脱走陸軍も苦戦続きの北関東から撤退して会津へと入ったのだ。食糧・弾薬の補給問題に加えて、僻地での連戦が歩兵を疲弊させているのだ。七月の戦線復帰の前後から歳三は奥羽越列藩同盟との連携を模索するのだ。

奥州街道の重要な拠点はへ白河―須賀川―郡山―二本松―福島―桑折―白石へと続き、仙台へと至るのだ。と同時に、各地から猪苗代湖方面へ進めば会津と通じるのだ。第一関門の白河を新政府軍に突破され、

須賀川口「福島県須賀川市」を守る、七月上旬に土方部隊を率いる歳三は、須賀川口へ出張したと記録されるが、実際の歳三は福良に滞在していたようだ。『慶應日記』では十四日には酒席を囲み、二十日には「土方様、湖水見物」と記されているのである。このころ、仙台藩は歳三に「仙台行き」を強く働きかけていた。伝習第一大隊の分隊長の大嶋も仙台行きを提案しており、列藩同盟の郡司総裁に就いた竹中の意向を反映した可能性が高いのだ。七月上旬になって、「土方を始め、伝習第一大隊、分隊、新撰組とともに、二本松に入った官軍を払い、仙台に行くことを決めた」（『谷口日記』）すでに内田が伝習第一大隊半隊を率いて、仙台へ赴いているのだ。明らかに歳三は、主戦場を防御の難しい内陸部の会津ではなく、旧幕府脱走海軍も寄港できる仙台と想定しているのだ。薩長と戦うために、仙台藩兵の洋式部隊化を急ぎ、それが、歳三の至上命題となっているのだ。ところが、仙台行きが本格化する前に、新政府軍は白河城（奥州街道）、磐城平城（浜通り）などを攻略し、七月二十九日には二本松城を陥落させ、会津藩境へと迫っていたのだ。伝習第一大隊半隊、分隊、回天隊、会津新撰組などの土方部隊は、二本松口に赴く予定だったが、三代へ転陣したのだ。

因みに、歳三の佩刀では「和泉守兼定」が有名であるが、秋月から譲られた刀に「大和守源秀国」も現存する。表に「秋月種明（登之助）が懇望して帯びた刀」、そして裏面には「幕府侍土方義豊戦刀」と銘が刻まれている。幕府侍こそが歳三の誇りであり、生き甲斐だったと思う。八月十七日に福島軍務局に集結した列藩同盟軍は二本松城奪回を試みるが、あつげなく敗れ去る。その結果、二本松を拠点とする新政府軍は、厳寒期に入る前の会津総攻撃を決める。すでに七月末には新潟を陥没させ、新政府軍は越後口の戦いにも勝利を収めていた。十八日には、会津藩の要請に基づき、土方部隊は猪苗代へ向かう。湖南から湖北への移動であるが、歳三は同行していないのだ。翌十九日に土方部隊は母成峠（將軍山）の守備に就き、仙台行きは「母成峠で一戦した後に」と予定の変更をするのだ。ひとまず、会津の恩義に報いようと考えたのだ。二十一日午前、新政府軍二千六百人が母成峠を攻め登る。圧倒的な兵力差の前に、夕刻になって混成軍は、猪苗代方面へ敗走する。その悲惨な状況を、

「新撰組隊士の近藤芳助は次のようにしている。「新撰組の一隊は、士官が二十一、二名しかおらず、皆が旧幕府歩兵の落武者を集め、よく戦った。が母成峠敗走によって、新撰組の死傷者や所在不明者は多く、銃器弾薬を始め個人所有物も残らず、新政府軍の戦利品となった」そして、原文では「哀れなる末路支離滅裂。武器は弾なき小銃と一刀帯ぶるのみ」と続くのだ。この夜、歳三は会津藩重臣に書状を認めた。歳三がどこで惨敗を聞いたかは判然としないが、猪苗代付近までは来ていたらしいのだ。現在、確認されている最後の手紙である。「明朝までに（新政府軍は）必ず猪苗代へ来ますので、諸口（各方面）の兵隊残らず廻してください。さもなければ、明日中に会津若松に押し寄せてくるでしょう」歳三は兵力の集中を要請したものの、自ら参戦する意思はなかったようだ。敗走した会津新撰組隊長の山口は猪苗代城での軍議で歳三に出会い、会津新撰組会津若松城下へ退いたとされるのだ。この時点で歳三は会津に見切りをつけ、ワンテンポ遅れの仙台行きの決行となった。二十二日の夜、敗走した会津新撰組は、会津若松城下の旅宿の斎藤屋に泊まった。三代滞陣のときは総勢百七人を数えたが、宿泊したのは三十八人で、隊士が二十人、歩兵などが五十人近く減っている、死傷者のみならず、脱走者もいるのだ。翌二十三日に新政府軍は会津若松城総攻撃を開始するので、その晩、今後の方向性について論議が交わされたようだ。そのとき、副長の安富以下九人は、伝習第一大隊の浅田以下五十八人と分隊の大嶋以下二十九人とともに、当初予定の仙台行きを主張し、土方歳三の意向に沿う形である。しかし、隊長の山口以下数人は会津残留を唱えた。山口の遺談には、「土方歳三など新撰組の一部に会津藩の大勢救うべからず、仙台を経て榎本武揚などの函館の軍に至らんとする声ありしが、新撰組が今日まで、会津のためにすこぶる恩顧を蒙りしを、今日振り捨てて忍びずとして、多数とともに会津に止まる」とある。この時点で「旧幕府脱走軍の箱館行き」はまだ決定してないのだ。歳三と安富派は仙台再起、山口派は会津残留を主張したのだ。山口派が多数で会津新撰組は分裂するが、喧嘩別れではなく、ここに至れば「お互いの意思を尊重して」というスタンスだった色合いが濃く、土方部隊は、大島部隊（伝習第二大隊）など同行し、九月十二日に土湯経由で福島に出たのだ。もう米

沢藩が関所を閉じてしまい、領内の通行を許さなかったからだ。この大鳥が率いる旧幕府脱走陸軍は「仙台を目指した」とよくいわれるが、それは結果論に過ぎないのだ。同時期に旧幕府脱走海陸軍が仙台入りしたのだが、タイムラグがあり、大鳥が列藩同盟や歳三と連携を図っていた様子はなく、旧幕府海軍の榎本と「仙台で落ち合おう」と事前協議していた雰囲気もなく、実態はバラバラに近いのだ。歳三が仙台入りした日はハッキリしておらず、確かなのは八月二十二日に会津を発ち、九月三日までに仙台入りを果たしたことだけである。列藩同盟の軍議で挽回するには「全軍を指揮する総督を選び、福島へ出陣する必要があるでしょう」と榎本は力説したのだ。今や奥州街道や福島が、列藩同盟軍の最前線となっており、「その任に当たるのは、歳三をおいて他にはいません」と榎本は歳三を総督に推し、列藩同盟の諸士は賛意を示したのだ。榎本に勧められた歳三は「大任ですが、死をもって尽くす覚悟ですので、各藩のご依頼はあえて辞しません」と就任に意欲を示せたのだ。また歳三は総督を將軍と表現し、「不肖なりといえども、あえて將軍の印綬を帯びることを辞しません」と語ったのだ。だが、受けるにあたって、歳三は条件をひとつ付けたのだ。「指揮するからには軍令を厳しくします。命令に背く者は、たとえ御大藩の宿老衆（重臣）といえども、この歳三の三尺の剣に掛けて斬ってしまわねばなりません。『生殺与奪の権を総督に付ける』というご依頼であれば受けますが、いかがでしょうか？」と、権限付与を強く求めたのだ。軍律の権化、鬼であることが、よく理解いただけると思うのだ。しかし、「生殺与奪の拳は、藩主に帰属する」という異論が出された結果、総督就任は見送られたのだ。歳三は席を蹴るように立って、部屋を後にしたと言われ、無念の気持ちにがにじみ出ているのだ。京都新撰組以来、歳三が追い求めたのは、法度と軍律を縛りとする横断型組織だったのだ。しかし、主従関係を軸とする垂直型組織「藩」のフレームを超えるのは容易ではないのだ。仙台に集結したものの、旧幕府脱走海陸軍は身の置き所がなく、榎本の主張に従って、「修理した軍艦に陸軍を乗せ、蝦夷地（北海道）に赴く」ことを決めたのだ。そのころ、榎本の縁戚にあたる医師の松本も仙台に来ていたが、「榎本は自信家であるがゆえに、今回の拳（蝦夷への脱走）も成功は難しいだ

ろう」と考え、榎本に蝦夷地渡航反対を伝えたのだ。全体に、「外国に行くような風評だった」（田村銀之助談）らしいのだ。榎本と行動をとるにもする土方歳三も、内心では「君の所説すこぶる我が意と合す」（「蘭疇」と松本の考えに合意していたのだ。しかも渡航反対を公言すれば、ほとんどの脱走者が同意してしまい、旧幕府脱走軍そのものが崩壊しかねない。だから内心に留め置いているのだ。さらに歳三は、「そもそも今回の戦いは、幕府が倒れようとしているのに、ひとりとして腕力に訴えて、死ぬ者がいないのを恥じてのことです。到底勝算があつてのことではありません。貴君（松本）は前途有用な人ですから、江戸に戻られたほうがよろしいでしょう」と語り、「ただ、私のような無能者は早く戦い、国家に殉ずるだけです」と結ぶ。幕府侍の歳三に去来するのは、旧幕府への忠義のために快戦することであり、ベストを尽くして戦う思いだけで、それこそが、彼が理想とする武士道であり、男の意気地である。最終的に蝦夷地を目指した隊士は十数人で、歳三、安富、尾関、島田、横倉、中島、蟻通、山野、沢、立川などの生え抜きの同志に加えて、土方家来の市村や田村といった少年も渡航を決めたのだ。石巻での歳三は、旧幕府脱走軍全体の物資輸送も担当したのだ。人夫や船夫を調達動員して、仙台藩が提供した膨大な食糧（米・味噌・醤油・砂糖・酒）や燃料（薪・炭、ろうそく）などを艦隊に搭載する作業であり、「伝習隊の隊長・土方俊三（歳三）様より船夫へ、御酒代として」といった地元資料も残っている。その一方で、厳しい評価もあり、「すこぶる威張る」と日記に記す旧幕府の文官もいた。会津で会った望月と同様に、戦闘時、武官にスライドしない文官に対して、土方歳三は高圧的な態度で臨んだようだ。十月十一日に軍艦に分乗して蝦夷地へ出発した、歳三と新撰組は、大江丸に乗り込んだ。

#### 蝦夷地の土方歳三と土方歳三の最期

十月二十一日に内浦湾の鷺の木へ北海道森町の沖に着き、分乗していた諸隊は上陸を開始したのだ。旧幕府脱走軍は箱館府扶撃を目指し、降りしきる雪の中を二手に分かれて進軍するのだ。内陸部の本道総督には大鳥が、海岸沿いの間道総督には歳三が就任したのだ。新撰組は

安富が率いたのだが、この間の事情を、新撰組に加入した桑名藩士の石井勇次郎は、「我隊（新撰組）の長の土方歳三君は別を進むゆえに代わる」と記し、隊長並の安富が代行を果たしたとし、確かに歳三は新撰組再編に尽力したが、隊長よりも上位のオーナー的な存在であり、実質的な隊長は安富が務めていたと考えられるのだ。大鳥部隊は、ハ鷲ノ木↓森↓峠↓七重と大野↓と進み、五稜郭へ行軍し、途中、七重と大野に布陣した新政府軍と交戦し打ち破ったのだ。一方の土方部隊約八百人は、額兵隊（星）、衝鋒隊（古屋）、陸軍隊（春日）から構成され、ハ鷲ノ木↓森↓砂原↓川汲峠↓湯ノ川↓と進軍したのだ。新政府軍と戦闘を交わしたものの、敵はむしろ寒さであったのだ。なお、このとき、陸軍隊に野村利三郎が率いる一隊が属していたが、先鋒を巡って隊長の春日と激しい口論になり、双方が抜刀となったのだ。事件は、駆け付けた歳三の仲介でいったん解決したが、後日、春日は「隊長に反抗した野村を軍法会議にかけてほしい」と榎本へ訴えたのだ。しかし榎本は野村の人物を惜しみ、死罪を免じたようだ。軍律の意味合いがよくわかるエピソードである。二十六日に五稜郭に入城し、休む間もなく、二十八日に歳三は松前攻城に向けて出陣したのだ。陸軍隊を率いて、城の裏手に廻り、梯子をかけて石垣を登り、城中に潜入する作戦だ。結果、背面から攻撃された松前藩は城を捨てて敗走したというのだ。いわば歳三は城攻めの常勝將軍であり、松前城攻略に成功した歳三は、江差陣屋に逃げた松前藩兵を追討し、十五日に蝦夷地を平定したのだ。ところが、大きなアクシデントが旧幕府海軍を襲い、陸軍応援のため、江差沖に回航した主力艦の開陽が暴風雨に遭って座礁し、沈没してしまっただのだ。さらに救援に向かった軍艦の神速もまた暗礁に乗り上げるのだ。この二隻の沈没事故は、旧幕府艦隊による北海制海権を大きく後退させることになり、旧幕府艦隊の軍事的な優位性が失われたのだ。十二月十四日に土方部隊が松前から五稜郭に凱旋するのだ。その少し後に歳三は陸軍奉行並に選出されたのだ。陸軍奉行並に就いた土方歳三は、箱館市中取締と海陸裁判局頭取を兼ねたのだ。陸軍奉行並の「並」とは次官の意味である。兼務の箱館市中取締は「警視總監」、海陸裁判局頭取は混成軍の「軍法会議最高責任者」「軍監の統括者」のイメージとなるのだ。新撰組は、陸

軍奉行並の歳三が管轄するのは、あくまでも平時の任務であって、戦時ではないのだ。戦時の新撰組は陸軍奉行の大鳥の指揮下に入るのだ。蝦夷地上陸の（大鳥＝本道部隊、歳三＝間道部隊）がおおよそ管掌となるからだ。「歳三と新撰組は一体」と思われがちだが、再編された新撰組がオーナーの歳三と軍事行動をともにすることはないのだ。明治二年三月中旬、探索方から箱館政府に「新政府軍が品川を出航し、下旬には燃料補給地の宮古湾に到着予定」という情報が寄せられたのだ。主力艦の甲鉄（ストーンウォール）、朝陽、春日などが、来るべき出撃のために北上を始めたのだ。旧幕府海軍では主力艦が沈没したために、北海制海権は大きく後退していたのだ。奪い返した甲鉄を主力艦とし、制海権の回復を図るという作戦を「歳三の立案」と書かれるケースもあるが、管掌外の話であくまでも海軍主導型の企てで、一種賭けに近いのだ。三月二十三日に三艦が箱館を出航し、落ち合うのは、宮古湾の南にある山田湾である。歳三は管轄テリトリーに従って、乗船した陸軍部隊の指揮を執ったのだ。海上といっても、間道遠征に変わりはなく、従って相馬や野村は、あくまでも添役（介）の立場で臨んだわけで、箱館新撰組そのものは乗艦していない。途中船足の違う三艦は風雨に遭いバラバラとなり、かろうじて待ち合わせ場所に着いた回天と高雄は宮古湾を指すが、今度は高雄にエンジントラブルが発生したため、回天が単独で宮古湾突入を敢行するのだ。さらに回天の甲板位地が甲鉄より三メートルも高く、水没する可能性が高いと感じ敵艦に飛び移ろうとしない。躊躇する士官に、海軍奉行の荒井、艦長の甲賀は抜刀して「アポルダージ！」（飛入り）と命令を下すのだ。覚悟を決めて海軍測量士官の大塚浪次郎が甲鉄の甲板を目指して飛び降り、以下、数人の士官が大塚に続く、その中に野村の姿もあったが、誤って海中に落ちて没したと言われる。享年二十六歳。空前絶後と言うべき戦闘は約三十分で終わり、甲鉄内で五人が討死、回天では狙撃された甲賀らが死亡を遂げ、奇襲は失敗に終わったのだ。惨敗を喫した結果、箱館政府艦隊は三隻にまで減少したのだ。四月六日に青森に終結した新政府軍は、蝦夷地進行を開始するのだ。箱館政府三千人も迎撃態勢に入り、箱館新撰組は弁天台場を本営とし、厳重な市中巡邏を行う。九日に江差北方の乙部に上陸した新政府軍は、三ルートに分

かれて南下するが、直接、箱館を攻撃しなかったのは、箱館政府艦隊三隻が港を固め、砲撃態勢に入っていたからだ。箱館を目指す新政府軍は、①海岸線に沿って松前へ向かう松前口部隊②江差から内陸を進む木古内口部隊③ほぼ直進コースで半島を横断する二股口部隊に分かれたのだ。それに対して箱館政府からは、①松前口には松前守備の遊撃隊②木古内口には本道総督の大島③二股口には間道総督の歳三が出張したのだ。歳三が率いたのは、衝鋒隊、伝習歩兵の二百人弱で軍監として大嶋と大野が従う。さて、二股口に到着した土方部隊は、山上、山腹に十数カ所の射撃基地を設置した。十三日午後三時、押し寄せた新政府軍六百人が攻撃を開始し、土方部隊はその三分の一の兵力で撃退する。銃撃戦は翌朝六時までの十六時間に及び、土方部隊は三万五千発もの弾薬を撃ち続け、新政府軍撃退に成功したのだ。硝煙で全員の顔が真っ黒になり、互いに「悪党面」と笑い合ったというのだ。また雨のために戦場が一時膠着状態になったとき、歳三は自ら酒樽を担いで兵に酒を振る舞った。「酒に酔って軍律を侵すといけないので、一人一杯だけ」と語りながら。ただし激戦とは裏腹に、新政府軍の死傷者は少数に過ぎず、二十三日に再び二股口を攻撃した。土方部隊にも歩兵が増強されているのだ。第二次戦闘は二昼夜に及び、連射のために熱くなった銃身を水で冷やしながらか、またもや土方部隊は撃退を成し遂げた。この迎撃戦での勝利は、常勝將軍・土方歳三の名を決定づけ、歳三の家来の立川も「土方氏は常に万民を憐れみ、出陣に際しては先頭を進んだので、士卒は勇気を奮って進んだ。ゆえに敗れることはなかった」（『立川主税戦争日記』）と絶賛している。しかし歳三は二股口への出陣に際して覚悟を決めていた節があり、土方家来の子孫に自信の写真（箱館で撮影）や時世の和歌などを託し五稜郭を脱出させ、日野宿の佐藤へ遺品を届けるためだ。京都以来、歳三に随従した市村は「歳三が最も寵遇した十六歳の少年」というのだ。四月中旬に、親しい商人の手引きで、外国商船に乗った市村は蝦夷地を後にする。五月一日に二股口から五稜郭に戻った土方歳三は、榎本総裁に面会後に弁天台場を訪れ、箱館新撰組に「有川夜襲」の命令を伝えたのだ。これが結果として、歳三と新撰組との最期の別れとなり、敗色が濃くなる中、歳三が希望したのである。ただし、箱館新撰組が土方部隊

に編入されたわけではない。蝦夷地に来て以来、歳三は粗食に甘んじ、女性を近づけることなく、「近藤とともに死ななかつたのは、ひとえに徳川家の冤（濡れ衣）を雪ぐためだ。万が一、赦されたら、面目なくて近藤に見えることはできない」（『譚海』）と、常々語っていたというのだ。そのため、最期の出撃に歳三は死地を求めたといわれ、その通りかも知れないのだが、出撃には、直接的な動機が合ったはずだ。「出撃は孤立した弁天台場を救うためだ。中には新撰組が籠っている」とする向きもあるが、確かに大きな動機だが、彰義隊頭取の寺沢正明によれば、この日、歳三は「新撰組が持ち場を怠ったため、箱館が危機に陥った」ことを知り、その罪を雪ぐために五稜郭から出撃したといわれ、この説を信じるべきである。五稜郭出撃の模様を隊士の島田は「土方歳三は馬にまたがり、彰義隊、額兵隊、見国隊、杜陵隊、伝習士官隊の合計五百人を率いて、弁天台場を救おうとした」と記すが、弁天台場に籠った島田が出撃を知ることが出来ず、さすがに五百人は過大なのだ。援軍を求める大野は一本木関門を過ぎ、千代ヶ岡陣屋に至って土方歳三と出会う。陣屋で土方歳三に従った大野は方向転換をして、ともに一本木関門に至る。そこへ、市中から総崩れとなった伝習士官隊が敗走してくる。このとき、唯一の軍艦の蟠竜の撃った砲弾が敵艦を轟沈し、一瞬、兵に生気が蘇る。その絶好のタイミングに、土方歳三は大声で大野に叫び、「この機を逸してはならない。伝習士官隊を前進させよう。しかし急遽、敗兵を用いるのは難しい。私はこの柵（関門）で退く者を斬ろう。大野は兵を率いて戦え」と。大野は伝習士官隊と額兵隊を率いて前進するが、市中からの敗走兵は制止しても聞かず、どんどん関門を通過し、後退していくのだ。それを見て、大野は「奉行（歳三）がいるはずなのに、なぜ止めないのか」と不思議に思い、千代ヶ岡陣屋へ引き返すと、陸軍奉行添役の安富と大嶋がいたのだ。そこで初めて、大野は安富から歳三の戦死を知らされたのだ。「奉行は馬に跨がり、柵の側にいたが、狙撃されて死亡した」（『箱館戦記』）と。新政府軍の放った銃弾が、馬上にあった歳三の腹部を貫いたのだ。享年三十五歳。盟友近藤勇と同じ年齢で、一本木関門においてその生涯を閉じたのだ。時刻は午前九時頃だった。

戦死の際に付き添っていたのは、他に土方家来の沢などで歳三の遺骸



と馬を五稜郭に運び、遺骸は五稜郭内に埋葬されたが、その墓は失われている。翌十二日に安富は歳三の甥の隼人（作助）宛てに書状を記した。それを土方家来の立川を五稜郭から脱走させ、最期の模様を伝えようとした。そこに綴られたのは、側近の安富から見た「不屈の戦士・土方歳三」の活躍であり、安富も歳三を「伝習第一大隊長」と明記したので。そして安富は、書状の末尾に「隊長が討死されたので」として、「早き瀬に力足らぬや下り鮎」の句を添えたのだ。これが「歳三の辞世なのか、それとも安富の句か」は解釈の分かれるところで、先に脱出した市村に託された歳三辞世の和歌は「よしや身は 蝦夷の島辺に朽ちぬとも 魂は東の 君や守らむ」である。東の君こと徳川家に忠誠を尽くす幕府侍の思いが、ストリートに詠まれている。

現代の人々にアンケートを取った所、歳三は、「恐い、厳しい、剣術に長けている強い、マヨネーズ、名前は有名な人、新撰組の副長、新撰組を大切にしていた人、新撰組として最後まで闘った人、新撰組のために自ら汚れ役を引き受ける男性、鬼の副長と呼ばれるように厳しい面の方が表に出やすいけれど、実際は繊細で誰よりも新撰組の事を考えていた男性だ」と思う。また、俳句を書いていたところからもロマンチストだと思ふ、イケメン、近藤さんを慕っている、新撰組の副リーダーみたいな存在男前、クール、恐ろしいイメージがあるが実はお茶目なところもあり仕事が絡んでなかったら優しいイメージが持てていないです、グループをまとめ上げられるリーダー的な存在鬼の副長。『るろうに剣心』の齋藤のイメージ、だけど『銀魂』の印象つよいかも。あとアニメ、マンガ的に強く、厳しく偉く、知らない漢字読めない。男らしい。みんなを支えるリーダー的な。五稜郭で戦死する。男前で剣の腕もたつので女性からもてた。硬派なイメージイケメン、近藤の補佐役、鬼の副長芹沢鴨などを規律から守るため、近藤勇を局長にする等のために多くの隊士を殺害したということ、とても厳しい人のような印象を持っています。策略があり、剣術が強く、幕府に忠を尽くす人強い、写真はカッコいい。」という回答があった。様々なメディアで使われることとなった新撰組やその隊士たち、上位の人気の歳三は多くの人々に知られることとなり様々なイメージを持たれているのだと感じたのだ。

一部漫画などのイメージもあるのだが、それはそれで全く想像のつかない土方歳三というものも見られるので面白い一面でもある。

最後に、私にとつての土方歳三というものは少年時代からの憧れであり、強い武士の印象と局長の近藤勇からの命令でも自分が憎まれ役となり、厳しい命令や隊内粛清とイメージがとても強い歴史的な人物であった。しかし、それもこの論文を通じて感じたことはそのような部分も多い人物ではあると思うのだが、新撰組という鳥合の集団を束ねていくためにはそのような気持ちも必要だったのではないかと感じるのだ。さらに、集団での責任感が強く、その責任を背負い、幕府のために刀を振り続けたのではないかと感じたのである。土方歳三が農民出身ということのコンプレックスというものを持ちながら生きていたということについては、特に感じるものがなかったので、いろいろなメディアで使われるような「農民育ちや百姓侍」という言葉が土方歳三自身にないということを感じることでできたよい機会でもあったのだ。それよりも土方歳三は「幕府侍・土方歳三」ということに誇りを持って戦っていたのだ。土方歳三に敬意を称し、私は勝手ながら「日ノ本最後の武士」という言葉を送りたい。

#### 《参考資料》

『土方歳三―新撰組を組織した男』 著者相川司 発行所中央公論社  
 『新撰組468隊士大名鑑』完全版』 監修壬生狼友の会 発行所小池書院

『土方歳三と新撰組10人の組長』 著者菊池明・伊東成郎・結喜しはや 発行所 中経出版

『新撰組知られざる隊士の真影』 著者相川司 発行所新紀元社

『未完の「多摩共和国」新撰組と民権の郷』 著者佐藤文明 発行所凱風社

『新撰組の謎と歴史を訪ねる』 著者山村竜也 発行所菅原茂 発行所K Kベストセラーズ

『歴史人62012/No.24』 編集人兼発行人高橋伸幸 発呼所K&Kベストセ  
ラーズ

『新・歴史群像シリーズ13土方歳三 洋装の「武士」として散った漢の  
一徹』 発行人大沢広彰 編集人小池徹郎 発行所株式会社 学習研  
究社

『歴史群像シリーズ72新選組隊士伝 蒼き群狼、その生と死の断章』 発  
行人中村雅夫 編集長新井邦弘 発行所株式会社 学習研究社

『歴史REAL新撰組の最後の戦士土方歳三と斉藤一「誠」を貫き、「剣」  
に生きた二人の激闘』 発行人江澤隆志 編集人藤原清貴 発行所株  
式会社 洋泉社

『Truth In History1 新撰組知られざる隊士の真影』 著者相川司 発  
行者高松謙二 発行所株式会社新紀元社